

新潟福祉文化を考える会現場セミナー報告

「北前船と出雲崎の文化財」～北前船が育む文化の魅力～

関矢 秀幸

(新潟福祉文化を考える会 前日本福祉文化学会北陸ブロック理事)

(現場セミナーの流れ)

今回の現場セミナーについては、新潟県教育委員会主催の表題研修会に参加し、前段、後段は、我々独自のセミナーとした。

まずは、県教育委員会のセミナー開催前に、我々は「良寛記念館」を見学した。

(独自セミナー1 良寛記念館)

良寛記念館は、平成 25 年 (2013) に経営母体を財団法人から出雲崎町に移管して以来、350 点以上にもおよぶ作品の寄贈と寄託を受けているとのことであり、ちょうど今回のセミナーと同時期に、作品の寄贈・寄託者をはじめ、良寛を敬慕し、良寛記念館を応援している方々に対して、感謝の意を込め『良寛記念館寄贈・寄託作品展』が開催されていた。我々も寄贈・寄託された名品、稀少な作品を、観覧させていただいた。

① テレビ東京の番組に登場

ここ良寛記念館は、眼下に出雲崎港と佐渡を見渡せる高台にたっており、風光明媚な、夕日も綺麗な場所でもある。今回、「出川哲郎の充電させてもらえませんか」の夕日シリーズのゴール地点として、ずんの飯尾とアンジャッシュ児嶋が出雲崎の夕日を目指す新潟・北国街道の旅であった。私もロケ地に向かう、出川、児島の電動バイク集団をみかけ、放映を楽しみにしていた。

(県主催セミナー「北前船と出雲崎の文化財」を聴講)

(1) 「出雲崎の文化財とその魅力」について、～小林ひろ子氏(出雲崎教育委員会)

「北前船」とは、江戸時代中期(18 世紀後半以降)～明治 30 年代にかけて、上方(瀬戸内)と松前(北海道)間を日本海周りで、主に買い積みで経営を行っていた船である。「北前」とは、1, 北を前にしてすすむから。2, 北国・松前間を走るから。3, 北国の米を運ぶから北米(きたまい)の転訛。4, 北廻り船の転訛。5, 当時、上方、瀬戸内から見て日本海地方を北国、北前と呼んでいたから。など言い伝えられている。出雲崎の湊業務としては、①佐渡運上金銀の荷揚②佐渡奉行及び公用で帰任・帰宅する役人等の世話③幕領の城米輸送④近隣の寺泊湊との交代制による無宿人の宿継業務⑤商品の取扱い。①～④の公用業務は、採算の取れる営業分野ではなかったが、公用業務を行うことにより、その権威を近隣の湊に示して、経済活動を有利にするところに公用業務の意義があったとのことである。また、船主と契約を結び、廻船の商品売買の仲介(廻船と商品の取引)を行

う商人。自らも船を所有して経営を行ったり、金融業を兼ねている人もいたとのことである。

同町羽黒神社には、危険と隣り合わせの航海を続けていた船主や船頭たちは、海上交通の安全を祈願して地元や寄港地の神社に船絵馬を奉納していたため、29点が奉納されている。同じく、光照寺の船絵馬5点も有名である。

(2)「お船唄」「出雲崎おけさ」について、～出雲崎おけさ保存会～

①「お船唄」は、昔北陸街道出雲崎のはんじょうは、佐渡からの金銀の陸揚げ、佐渡奉行並びに巡検使の渡航の送り迎え、上杉時代、上杉景勝が佐渡の本間一族を征伐の為、出雲崎港から、軍用船を差し向けたことなど、ことに佐渡奉行並びに、巡検使の渡海の送り迎えの時には、町役人をはじめ。町をあげて、お船唄の声もにぎやかに歌われたとのことで、今なおこの唄が、漁師衆のおめでたに歌われている。

②「出雲崎おけさ」は、長年にわたり親しまれてきたが、現在、全国的に知られている「おけさ」は佐渡おけさである。大正10年に「佐渡おけさ」が全国民謡大会で公演されたことをきっかけにレコードが作られ、全国にその名が広まりました。出雲崎おけさもそれに続く形として、レコードがつくられたとのことである。この録音を契機として、出雲崎おけさは民謡として確立し、日本中に広まっていった。

※当時のエピソード～昭和44年ころ、NHKラジオで出雲崎おけさが全国放送されることになり、町の下駄屋で録音された。当時の収録は途中で雑音が入ると途中から録りなおさねばならず、付近を通行止めにしても、最後まで収録するのに二日間かかったそうである。三味線や太鼓も当然生演奏だったので、大変な苦勞をしたと伝わっている。

(3)「北前船寄港地出雲崎の町並み」について～平山育男氏(長岡造形大学)

講師の話の総合すると、出雲崎は、佐渡の金銀荷揚げや北前船の寄港地として栄えた天領出雲崎であること。港町ならではの独特の雰囲気を経験できる町やであることがあげられる。また、多くの人が行きかかった北国街道、この街道に軒をつらねる妻入りの街並みも幾多の変遷を乗り越えて、往時の風情を今に伝えていることを熱く語られていた。また、講師の考えのとおり、妻入りの街並みを見るたびに、この地方一帯の政治、経済、文化、交通の中心として栄えたところであることを物語っている。

(独自セミナー2 道の駅出雲崎天領の里時代館)

越後出雲崎天領の里は佐渡を望む海岸線にそって造成された敷地面積21,000平方メートルを要する施設です。出雲崎は、元和2年(1616)佐渡からの金銀の陸揚げ港として越後で初めて代官所が置かれた直轄地「天領」となった。

天領の里は、そんな時代背景を再現した『天領出雲崎時代館』『出雲崎石油記念館』、そして出雲崎と周辺の特産品を販売する『物産センター』、旬の海の幸を楽しめる場所である。また施設内には、お休み食事処『陣や』、野外で憩う『日本海夕日公園』、観光スポット『夕風の橋』等を要し、出雲崎の観光拠点となっている。

道の駅の一押しスイーツが販売されたとのことで、一部紹介します。

出雲崎町の新しいスイーツ

2021.05.31

遂に「良寛コーヒーソフトクリーム」が完成しました。

5月26日にプレスリリースが行われ、販売は6月5日（土）プレリリース、翌6日（日）にグランドリリースされます。

既存の良寛コーヒーとは違い、苦みや酸味まで感じられるコーヒー好きにはたまらないソフトクリームです。

出雲崎町の新スイーツ。

是非一度ご賞味ください。

コーヒーソフトクリーム1個450円

コーヒー&ミルク MIX ソフトクリーム1個450円

(独自セミナー3 出雲崎といえば良寛牛乳)

我々は、天領里見学ののち、地元の良寛牛乳の工場に向かった。工場敷地には、プレハブの直営売店が建てられており、絞ったばかりの牛乳でソフトクリームを食べたり、牛乳をいただき満喫した我々であった。

① 良寛牛乳の由来

平成29年出雲崎酪農組合から株式会社に組織変更するさい、地元出雲崎出身の名僧「良寛さん」にあやかり、新社名を株式会社良寛といたしました。良寛さんは、江戸時代後期(1758年)に越後出雲崎で生まれ、幼い頃から学門に親しみました。22歳から岡山県の円通寺に赴いて仏道修行に励み、35歳頃越後に帰郷後は、生涯にわたって寺を持たず、貧しいながらも清らかな生き方を通しました。

特に、子供たちと遊んだなどの逸話から慈愛に満ちたお人柄は、現代の人たちにも広く親しまれています。

(追加豆知識～出雲崎の逸品)

① 紙ふうせん

出雲崎町では、1919年から海の荒れる冬場の漁業に変わる仕事として、また漁師の妻の手仕事として、「紙ふうせん」作りが始まりました。昭和初期までは、首都圏でも盛んに作られていましたが、現在国内では唯一、出雲崎で製造しています。